

受賞： 鉄道史学会住田奨励賞 第1部門 (2016年9月/第7回)

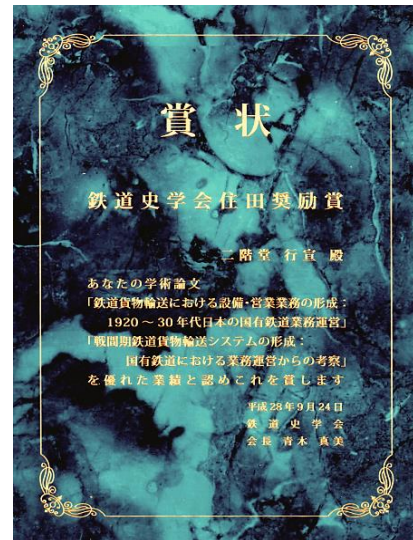
対象： ①二階堂行宣「鉄道貨物輸送における設備・営業業務の形成—1920～30年代日本の国有鉄道業務運営—」(『鉄道史学』第32号、鉄道史学会、2014年10月)

②二階堂行宣「戦間期鉄道貨物輸送システムの形成—国有鉄道における業務運営からの考察—」(『経営史学』第49巻4号、経営史学会、2015年3月)

概要：

鉄道史学会住田奨励賞(第1部門)は、鉄道を中心とする近代交通史に関する研究のうち、特に優れた業績をあげたものに授与されるものです。

私の専攻分野は、「日本経済史」ないし「日本経営史」と呼ばれる、歴史的アプローチに立脚した経済学・経営学研究の領域です。そして、組織内部のマネジメントの構造がどのように形成・機能し、その長期的な変遷はどのような過程を経て実現するのか、という現在にも通じる課題に対し、日本屈指の巨大組織・国有鉄道(国鉄)を事例とした実証的考察から示唆を得ること、これが私の研究を貫く大きなモチベーションです。受賞対象となった上記2論文は、戦前日本の国鉄貨物輸送を扱ったものですが、国鉄内で当時刊行されていた各種部内報など一次史料を幅広く収集・検討し、事業官庁に特徴的な業務運営の実態を明らかにしたこと、また、そのことによって研究史の実証水準を高めたことが評価されたと理解しています。



1910年代の日本では、第一次世界大戦ブームを背景に全国的な長距離輸送の需要が急拡大し、鉄道国有法によって誕生したばかりの国鉄は、その要請に応える必要がありました。しかしその後、1920年代の日本は一転して慢性不況に苦しみ、鉄道輸送量は伸び悩みます。そして1930年代に入ると景気は再び好転、需要が国鉄の輸送能力を超えて急増する一方で、対抗輸送機関である自動車も著しく進出し、国鉄は苦しみながらその地位を徐々に低下させていきます。

この激しい経済環境変化のなか、国鉄貨物部門の当局者たちはどのような考えのもと、どのように対応策を企画・実施し、自らの使命を全うしようとしたのか？この疑問に対し、論文①では1920年代半ば～30年代を、論文②ではその前段にあたる1910年代～1920年代前半を対象として、それぞれ検討しました。詳細は割愛しますが、国鉄はトップ・マネジメント(高級官僚層)の的確な状況認識のもと、部内に次々と新しい下部業務を創出し、人事を通じてその権限を適宜ミドル・マネジメント(実務官僚層)に委任するという業務運営パターンにより、柔軟に環境適応を果たしていました。つまり、国鉄トップは高所からの意思決定や制度設計を、ミドルは豊富な実務経験に基づく組織内コミュニケーションを担い、それぞれが権限関係を状況に応じて変化させていくことで、官僚的身分制度のデメリット克服と、鉄道事業の活性化を達成したわけです。

以上のプロセスは、部内各業務間の対立・妥協をはらみつつ、さらに国家の経済政策運営とも密接に関連し合う形で、ダイナミックに展開していきます。上記論文の執筆時、私は大学院生でしたが、当時の雰囲気を感じられる「生」の資料から様々なメッセージを読み解く作業は、本当に面白いものでした。歴史的アプローチが得意とするものの一つに、俯瞰的・長期的視野からの「変化」の解明がありますが、その醍醐味を日々感じながら研究を進めることができました。

今後は、経済学・経営学・歴史学などの研究動向にも目配りしつつ、上記の業務運営が機能不全に陥る1980年代までも射程に収め、より深く、長い分析軸から巨大組織・国鉄の問題発見に努めたいと考えています。同時に、歴史に携わる者の使命として、史資料の発掘・整理・公開など研究基盤構築の営みにも、関係各位のご理解をいただきながら、地道に取り組む所存です。